平成２８年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	中部教育事務所	学校名	北上市立南中学校	TEL	0197-67-4318

組織的に取り組む学力向上

【今年度の目標】

(1) まなびフェストの数値目標や調査結果活用レポートの分析からの達成目標を設定し、その実現をめざす取組を行う。
(2) アクションリサーチの手法や「わかる授業」の実践に調査結果活用レポートの視点をふまえて、授業改善を行う。
(3) 中学校区の授業改善として、小中の授業参観、出前授業や師範授業の授業研究会を行う。
(4) 授業と家庭学習とのより充実した連動を図る手だて（学習の手引きの活用）を工夫し、目標達成に取り組む。
(5) メンタリングマネジメントの手法を活用した授業改善における校内 OJT のシステムを確立する。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

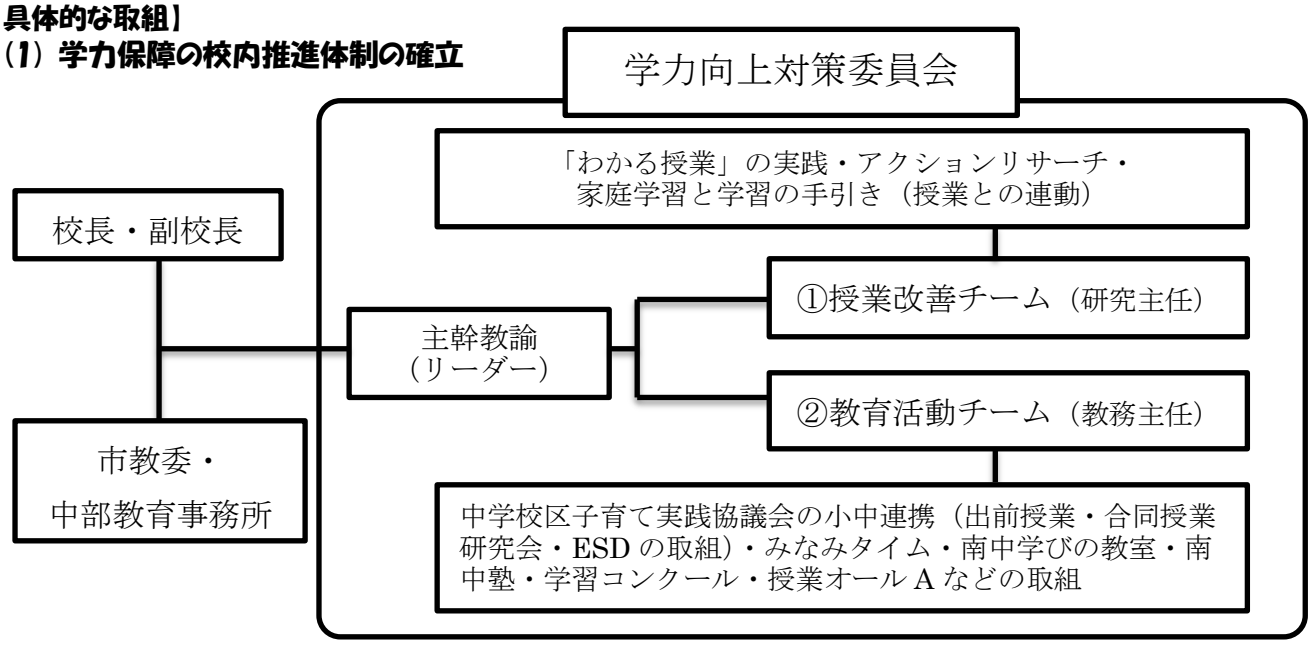
(1) 学力保障の校内推進体制の確立
(2) 調査結果活用レポートについての学習会の実施・各諸調査の結果分析と事後指導
(3) 「わかる授業」の取組を通した実践とまとめ（振り返り）とアクションリサーチ
(4) 中学校区子育て実践協議会と連動した小中の授業改善の取組（出前授業・授業研・ESD）
(5) 学力保障を意図した取組（南中学びの教室：学習ボランティアの活用・南中塾）
(6) 家庭学習と授業の充実した連動を図る取組（学習の手引きの作成と実践）
(7) 生徒会学習委員会による自治的な学力向上の取組（「みなみタイム」、学習コンクール、体力作りの実施）

本校は、平成２５・２６年度の２年間にわたり、北上市教育委員会の指定を受け、**「確かな学力をはぐくむ指導の工夫～協同的な学習を取り入れた、教えて考えさせる指導を通して～」**を研究主題・副題にかかげ、２６年度には学校公開を行い、研究実践を公開してきたところである。その後も継続的に研究を進め、平成２７・２８年度も同様の校内研究テーマで、基礎的・基本的な知識および技能を確実に習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などの能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うための研究を進めている。

本年度はさらに、**「各種調査結果を活用した学力保障の取組先進実践校事業」**（県事業）**と「『わかる授業』づくりのための学校訪問事業」**（教育事務所事業）の指定を受け、個々の教員の授業力向上と生徒の学力保障に取り組んできた。

【具体的な取組】

（1）学力保障の校内推進体制の確立



※このような特別委員会を設置し、実践の内容をそれぞれのチームを中心に推進した。

(2) 調査結果活用レポートについての学習会の実施・各諸調査の結果分析と事後指導(過去問の解説と問題を解く体験)

昨年度の２月に、それまでに実施した全国学調、県学調、アンケート調査、NRT、体力テスト等のデータ及び分析から、問題演習を行い、２８年度のまなびフェスト等の数値目標を決定した。

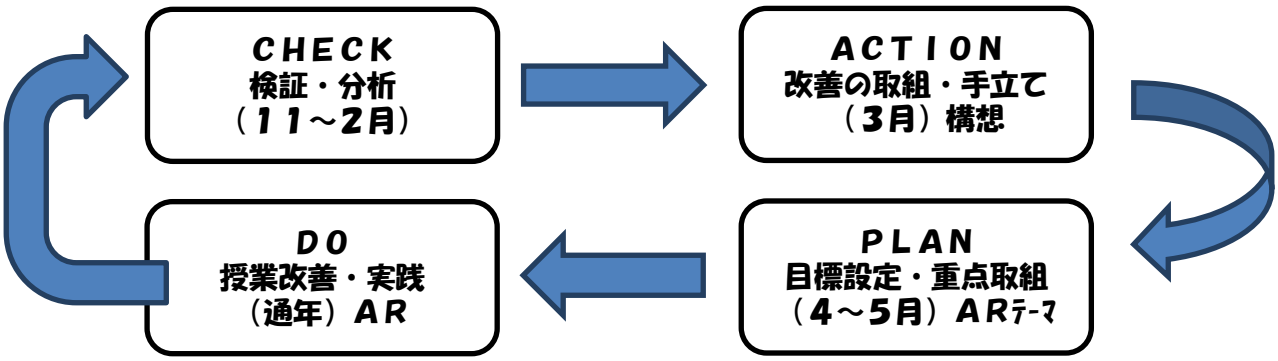
４月の職員会議では、学力保障の捉え方、CAPD サイクルの確認、学力向上委員会の組織、まなびフェスト等の数値目標（エビデンスと説明責任）の内容、諸調査の分析や問題の演習を行い、各教科における「わかる授業」の取組や一人ひとりのアクションリサーチ研究の構想に、その視点を入れながら、研究を進めることとした。

県学習定着度状況調査を中心にデータを参考にしながら、１学期の前半で５教科以外は、他の調査、例えば体育であれば体力テスト、それ以外は質問紙調査の結果を参考に、授業で取り組む視点を決めて、授業改善に取り組むサイクルを確認した。

＜具体的な実践例（２）－１＞　ＰＤＣＡサイクルからＣＡＰＤサイクルへ

ここ数年、企業ではマネジメントサイクルは PDCA から、実際は C→A→P→D と考え、何かやろうとしたとき、必ず現状調査、分析を行い、CHECK が最初のサイクルとなり、分析結果がエビデンスとなることを確認した。２月の職員会議では、県学習定着度状況調査について、学力向上担当の主幹教諭が作成した「調査結果活用レポート」の内容について全職員が共通理解をし、ＣＡＰＤサイクルをスタートした。

<ＣＡＰＤのイメージ図>　「県学習定着度状況調査・市の学力調査」をベースに考えたサイクル



＜具体的な実践例（２）－２＞「まなびフェスト 2016」、「平成 27 年度調査結果活用レポート」より抜粋

２８年度具体的な目標値	２７年度の実態
①　県学調において、平均正答率の県との差を、全ての教科５ポイント以内とする。	最大差　5.7ポイント
②　得点分布の最頻値を右に２問以上動かす。	12点/32問中(最も左より)
③　35%以上の生徒が無解答の小問題をなくす。	５教科で７問（最大５８人）
④　地域、家庭と連携を図り、平日のテレビ等の視聴時間２時間以上の生徒を40%以下にする。	１年生:66%　２年生43% ３年生:66.4%
⑤　家庭学習時間「１時間未満」の生徒を60%以下にする。	１年生:76%　２年生:64% ３年生:37.2%
⑥　校内研の充実による授業改善を通し、生徒質問紙の「授業がよく分かる・分かる」の回答の割合を、全ての教科で80%以上とする。	最大　87% 最小　60% ※中２県学調質問紙より
⑦　授業の始まりに「本時の学習目標を確認している」の回答の割合を、全ての教科で90%以上とする。	２年生:67%　３年生:82.1%
⑧　授業の最後に「学習した内容を振り返る活動を行っている」の回答の割合を全ての教科で80%以上とする。	２年生:75%　３年生:72.9%

※①～⑥の項目は、諸調査の結果より南中の課題となっている部分
※⑦、⑧の項目は、「わかる授業」づくりチェックリスト（県教委）より

(3)「わかる授業」の取組を通した実践とまとめ(振り返り)とアクションリサーチ

本校は本年度、「『わかる授業』づくりのための学校訪問事業」（教育事務所事業）の指定を受け、全教科において授業研を実施した。本校の授業スタイルである、いわゆる「教えて考えさせる、協同的な学び」である南中授業モデルを県が示す「わかる授業」とリンクさせ、次の学習指導要領に示されるアクティブ・ラーニング（主体的、対話的な深い学び）へ移行させるモデルとした。

＜具体的な実践例(３)－１＞南中モデルとわかる授業モデルとの合体

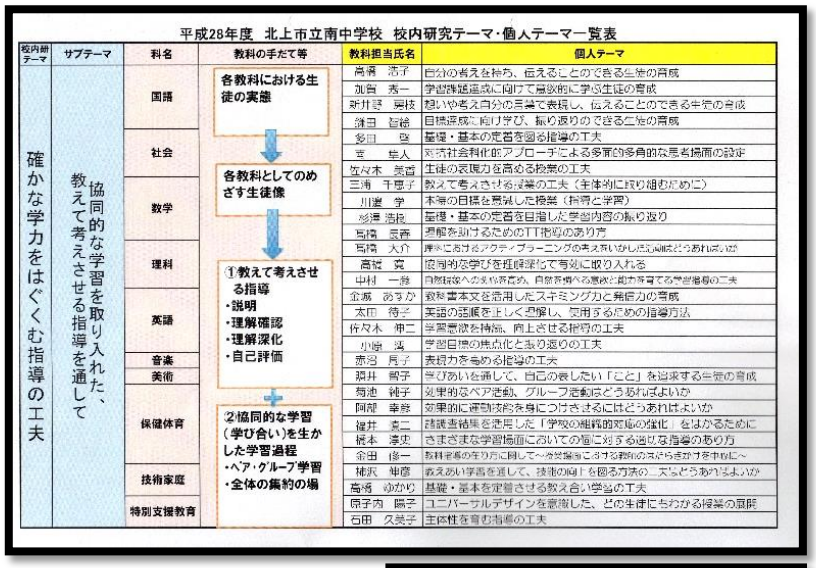
①見通し		**課題化、学習教材を自分と関わらせる。置換化、見通しを持たせる**	
		学習課題の設定	ゴールを見通す 学習課題（学習問題）の解決のための学習内容・学習プロセスの見通し
②学習活動	教えて	**説明**→評価規準Ｂを焦点化・明確化**『本時の目標と評価規準』本時の確かな学力**	
		必要な知識や技能をわかりやすく教える	・教科書の基本的な例題 ・生徒との対話的な説明 ・具体物やアニメーションによる提示・モデルの演示
	考えさせる・協同的な学び	**理解確認**→生徒の理解状況を把握する。**モニタリング**	
		生徒同士の教え合いや説明活動、類似問題等で理解の状況を確実に把握する	・ペアやグループでお互いに説明 ・わかったという生徒による教示 ・類似問題や練習問題による確認
		理解深化→『本時の困難度査定』の場面　応用・発展	
		獲得した知識や技能を活用して、考えがいのある課題に取り組み、理解を深めさせる	・誤りそうな問題 ・より一般的な法則への拡張 ・生徒による問題づくり ・応用・発展的課題 ・個々の知識・技能を活用した課題 ・試行錯誤による技能の習得 ・グループでの相互評価やアドバイス
③評価	振り返り	**自己評価**	
		自己の理解状態を把握させる	・わかったことやわからなかったことの記述 ・自己評価カードやチェックリストなど

ペアやグループの活動
グループ学習

基本男女４人交互の座席

＜具体的な実践例(３)-２＞
アクションリサーチを活用した一人一研究と授業研→「わかる授業」との連携

本校は３年前から、アクションリサーチを活用し、学校のテーマとは別に一人一研究と授業研を実施し、年度末にはその研究をＡ４版２ページ程度にまとめ、発表会をしてきた。今回は「わかる授業」と連動しながら、ＣＡＰＤサイクルで実践を行った。その際に、調査結果活用レポート等を活かしながら、授業での「いわての授業づくり３つの視点」と「南中スタイルの授業」を関連させて、①見通し、②学習活動、③振り返りを軸にエビデンスを絡めて授業改善を行った。※授業を構成する場合、それぞれの教科が調査結果活用レポートを参考に、この授業ではこういった視点で「確かな学力」の習得に力を入れることを明らかにして臨む。　※理解深化の段階では、Ｂ問題に対応するような、表現力や思考力を鍛える活動を心がける。


平成28年度　北上市立南中学校　校内研究テーマ・個人テーマ一覧表

校内研テーマ	サブテーマ	科名	教科の手だて等	教科担当氏名	個人テーマ
確かな学力をはぐくむ指導の工夫	協同的な学習を取り入れた、教えて考えさせる指導を通して	国語	各教科における生徒の実態	高橋　恭子	自分の考えを持ち、伝えることのできる生徒の育成
				加倉　秀一	学習課題達成に向けて意欲的に学ぶ生徒の育成
				新井野　美枝	想いや考え自分の言葉で表現し、伝えることのできる生徒の育成
		社会		鎌田　智徳	目標達成に向け学び、振り返りのできる生徒の育成
				多田　亮	基礎・基本の定着を図る指導の工夫
				吉　隆人	対話社会科化的アプローチによる多面的多角的な思考場面の設定
		数学	各教科としてのめざす生徒像	佐々木　美香	生徒の表現力を高める授業の工夫
				三浦　千恵子	教えて考えさせる授業の工夫（全体的に取り組むために）
				川邊　学	本等の目標を意識した授業（指導と学習）
				佐藤　清敏	基礎・基本の定着を目指した学習内容の振り返り
		理科	①教えて考えさせる指導 ・説明 ・理解確認 ・理解深化 ・自己評価	髙橋　泉香	理想の学び方を探るための工夫
				髙橋　大介	理科におけるアクティブラーニングの考え方を取り入れた授業はどうあればよいか
				高橋　寛	協同的な学びを理解深化で有効に取り入れる
				中村　一雅	自然現象への関心を高め、自然事物への意欲と能力を育てる学習指導の工夫
		英語		金澤　あすか	教科書本文を活用したスキミング力と発信力の育成
				太田　待子	英語の語感を正しく理解し、活用するための指導方法
				佐々木　伸二	学習意欲を持続、向上させる指導の工夫
		音楽		小原　満	学習目標の焦点化と振り返りの工夫
		美術		赤沼　見子	表現力を高める指導の工夫
		保健体育	②協同的な学習（学び合い）を生かした学習過程 ・ペア・グループ学習 ・全体の集約の場	照井　智子	学びあいを通して、自己の表したい「こと」を追求する生徒の育成
				菊池　純子	効果的なペア活動、グループ活動はどうあればよいか
				阿部　幸雄	効果的に運動技能を身につけさせるにはどうあればよいか
				櫻井　貴二	調査結果活用レポートを活用した「学級の組織的対場の強化」をはかるために
				桃本　清史	さまざまな学習場面においての個に対する適切な指導のあり方
		技術家庭		金田　修一	教科授業の作り方に関して～授業論における教科のあり方を考える中で～
				柿沢　伸彦	教えあい学習を通して、技能の向上を図る方法の一つとどうあればよいか
		特別支援教育		高橋　ゆかり	基礎・基本を定着させる教え合い学習の工夫
				原子内　陽子	ユニバーサルデザインを意識した、どの生徒にもわかる授業の展開
				石田　久美子	主体性を育む指導の工夫

(4) 中学校区子育て実践協議会と連動した小中の授業改善の取組(出前授業・授業研・ESD)

中学校区の幼稚園、保育園、小学校、中学校及び高校（北上翔南高校）で共通した取組として、読書週間とテスト前の学習時間調査を実施している。その他に、学期ごとに、鬼柳小、南小、南中学校の授業を参観し、学力向上にかかわる意見交換をしている。今年度は、本校の教員による出前授業（英語・音楽）を実施した。さらに、６月の南小の授業参観ではNHKプロフェッショナルの番組に出演した菊池省三先生による師範授業を参観し、望ましい学習集団の育成について、全教員で学ぶ機会を設けた。

中学校教員の出前授業

菊池省三先生の授業

(5) 学力保障を意図した取組（南中学びの教室：学習ボランティアの活用・南中塾）

南中学びの教室

本校のテスト結果を見ると学力下位層と上位層で二極化する傾向が見られる。そこで、下位層支援の手立てとして、地域連携推進事業として「南中学びの教室」を実施している。本年度は、地域からの学習ボランティアとして、４名に２学期から毎週木曜日に１時間ほど個別指導支援にあたっていただいている。４人の他に本校の教員（副担等）が加わり、生徒の質問等に答えている。また、各学期ごとの面談期間には「英語と数学の南中塾」（下位層への特別授業）を校長、副校長、主幹教諭、教務主任等で実施している。

学習の手引き

(6) 家庭学習と授業の充実した連動を図る取組（学習の手引きの作成と実践）

４月の教科オリエンテーション、PTA 総会等では各教科の「学習の手引き」を一覧表にまとめ、生徒及び各家庭に配布し、授業と家庭学習の効果的な連動を図っている。今回の県学習状況調査でいうと特に理科が意図的、計画的に１年生からの復習を行ったところ、県平均を３点以上上回る結果となった。

(7) 生徒会学習委員会による自治的な学力向上の取組（「みなみタイム」、学習コンクール、体力作りの実施）

生徒会の学習委員会が中心となり、次のような取組を行った。定期テスト前には予想問題を中心に学級全体で取り組む「みなみタイム」を実施し、基礎基本の定着を図った。また、定期的に５教科の基礎基本を確認する学習コンクールを学習委員会が行い、クラスごとの取組や平均点を発表した。部活動担当が体力テストの結果を踏まえながら、各部を中心に体力作りも計画的に実施した。

体力作りの取組

【成果】

(1)　学力保障の校内推進体制として、主幹教諭を中心に、①授業改善チーム（研究主任がチーフ）と②教育活動チーム（教務主任・生徒指導主事）をつくり、学力向上における「チーム南中」の役割分担を意識した取組ができた。特にも「調査結果活用レポート（２月）」から新体制の４月に再度確認して CAPD サイクルのスパンができたことは今後の学力保障のサイクルとして定着できると考える。

(2)　従来の校内研究テーマを継続しながらも「わかる授業」の教育事務所事業をとおして、授業改善のあり方を再認識することができた。また、具体的には次期指導要領の完全実施にむけた「アクティブ・ラーニング」への移行の土台もできたと考える。

(3)　まなびフェストに掲げた数値目標でいうと、２年生の岩手県学習状況調査では、各教科とも県平均と同等もしくは越える数値となっており、取り組んできたアクションが有効だったと思われる。

	国語		社会		数学		理科		英語	
県・南中	岩手県	南中	岩手県	南中	岩手県	南中	岩手県	南中	岩手県	南中
H26	62.9	67.0	49.0	47.6	54.8	49.5	55.8	51.7	52.4	48.2
H27	66.2	68.1	46.2	46.9	52.8	48.9	55.8	50.1	47.7	47.7
H28	70.5	70.4	44.9	45.1	51.1	51.0	47.7	50.0	41.8	40.6

(4)　中学校の取組だけに終わらせることなく、小中の学力保障のあり方について情報交換をしたり、指導法等で共同研究できたりしたことは大きな成果であった。